

メッセージアウトライン 創世記11:1～9「バベルの塔」

[1-2]「さて、全地は一つの話しことば、ひとつの共通のことばであった。人々が東の方へ移動したとき、彼らはシンアルの地に平地を見つけて、そこに住んだ」

すでに10章の民族の広がりの中でそれぞれの氏族ごとに言語が分かれていることが記されているので(10:5, 20, 31)、11章のこの出来事は時間的には10章の前に起こったことと思われる。

ノアの箱舟はアララテの山地にとどまった(8:4)。これは現在の黒海とカスピ海の中間のトルコのアルメニア地方にある山地で、そこからノアの子孫は広がっていた。彼らは住みよい地を捜して東の方に移動し、平地を見つけた。肥沃な地であったのであろう。そこはシンアルの地と呼ばれた。シンアルはシュメールとも呼ばれ、後にはバビロニアとして知られるようになる。現在のメソポタミア地方である。彼らは当然のこととして同じことばを話していた。

[3]「彼らは互いに言った。『さあ、れんがを作って、よく焼こう。』彼らは石の代わりにれんがを、漆喰の代わりに瀝青を用いた」

肥沃な平地への定着、ひとつのことばという生活環境は彼らのこれからの繁栄と発展を予想させる。しかし、それはあのエデンの園の再現ではなく、アダム以来の罪のゆえに「その心に凶ることがみな、いつも悪に傾く」(6:5)がゆえに、与えられた環境を乱す方向に進んで行く。ひとつのことばによる意思の疎通の自由が神へそむくことへの一致に結びつくのである。れんがの製造は石の少ないメソポタミアの平地では重大な意味を持つ技術であった。特に窯で焼く製法はその後の人間の文明の発展を象徴するもので、窯で熱処理したれんがは、それまでよりずっと高い建造物の出現を可能にした。漆喰は石灰に砂、粘土などを配合したもの。瀝青は天然のアスファルトのことで、れんがの接着と防水のためには漆喰にまざっていた。

[4]「彼らは言った。『さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。』」

神にそむこうとする人間の第一の問題は「町と頂が天に届く塔を建てる」ということにあった。彼らにとって「天」とは神が住まわれる所であり、頂が天に届く塔を建てるとは、神の住まいに達し、神と同じようになろうとすることと同じであった。→イザヤ14:13-14「名をあげよう」とは功名心を満足させようという意味。第二の問題は町と塔の建築工事に集中することによって、「われわれが地の全面に散らされる」ことを避けようと考えたことにあった。彼らは「生めよ。増えよ。地に満ちよ」「生めよ。増えよ。地に群がり、地に増えよ」(9:1,7)という神の祝福と命令を恐れ、きらったのである。彼らは神のみこころに従うのではなく、人間本位の文化、文明を発展させようとして一致団結したのであった。ここに人間の罪の姿がはっきりと表れている。

[5]「そのとき主は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた」

これは擬人法による表現で、人間のその才能と努力のゆえの巨大な塔も、神にとっては、わざわざ降りて来なければわからない程度のものであるという痛烈な風刺となっている。神はこの人間の行為をさばくお方として来られるのである。

[6-7]「主は言われた。『見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不

可能なことは何もない。さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。』」

「一つの民、同じ話しことば」本来祝福であるはずのこの一体性が罪の方向への一致と団結をうながす結果となる。人々の悪が一つの方向に向かって激化する時、それを放置することは最悪の結果をもたらすことになる。それは神からのさらなる離反と墮落と混乱である。→6:11~13

それゆえ神はこの問題に介入される。これは処罰のための介入である以上に徹底的な滅びに至らないための、神のあわれみによる配慮である。

神の介入は人間のことばを混乱させ、互いの意思疎通ができないようにすることであった。これがどのような方法で行われたかわからないが、明らかに神の介入による奇蹟である。

[8-9]「主が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建ててのをやめた。それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで主が全地の話しことばを混乱させ、そこから主が人々を地の全面に散らされたからである」

この言語の混乱は一人ひとり、個人個人にではなく、氏族単位で起こったことと考えられる。→10:5,20,31 今までは誰とでも会話が可能であったが、それが突然特定の人たちとしか会話ができなくなる。従って意思疎通もできなくなる。それゆえ彼らは町を建てること、塔を建てることできなくなってしまった。そのため、彼らは建てることをやめた。

神の介入により人間の滅びに至る悪への暴走はとどめられ、その結果、人々は地の全面に散らされることになったのである。「バベル(あるいはバビロン)」とは混乱を意味する動詞「バーラル」の変化形から来ている。「自分たちのために……名をあげよう」とした人間が現実を得た名は「混乱」そのものであった。

バビロンはこの後、聖書では政治的傲慢、迫害、罪、快楽、迷信、富、滅び等を象徴する重要な名となる。→イザヤ47章、ダニエル3章、黙示録17~18章

「生めよ。増えよ。地に群がり、地に増えよ」との神のことばは、人間の罪のゆえにゆがめられた形で混乱と分裂と離散のうちに実現していくことになった。

神は人間のことばを混乱させ、言語に多様性を与えられたが、やがてすべての民族、国民が一つとなって神を賛美する時が来ることも聖書は教えている。→ゼパニヤ3:9 (ゼパニヤはBC7世紀の預言者) また、ことばの壁が将来奇蹟的に取り除かれるということの一つの予兆は、あのペンテコステの日に聖霊が降られて、イエスの弟子たちが神のすばらしいみわざを多くの国のことばで語ることを可能にしたというところにも現れている。→使徒2:1~4,

神に逆らう自己中心的な人間の罪は、地に混乱と離散をもたらすことになったが、やがてすべての罪贖われた国民が神の前に立って、お互いに理解できることばで神を賛美するときが来る。→黙示録7:9~10 歴史はその時に向かって進んで行く。私たちもその時に向かって信仰を持って歩いていかなければならない。→使徒17:26~31、ヘブル12:1、ヨハネ3:16~18